

## H.U.グループホールディングス株式会社 2021年3月期上期決算説明会 主な質疑応答

[日 時] 2020年11月10日(火) 16:00~17:00

Q-1

- 新型コロナウイルス関連売上高 86 億円における、CLT・IVD それぞれの内訳は？

A-1

- 個別の開示はしていないが PCR 検査の受託数増加が示すように CLT の貢献が大きかった。

Q-2

- PCR 検査受託体制について、競合がキャパシティ拡大の方針を掲げているが、価格競争の懸念は？  
また、通期計画において診療報酬引き下げや、価格の見直しは織り込まれているのか？

A-2

- 期中における診療報酬の見直しは無いと想定している。見直しの時期や引き下げ幅の予測は困難だが、市場が拡大することによって価格への要求は高まると考えている。当社からの販売価格については、一定の変動の可能性を通期計画に織り込んでいるものの、現状で大きな変動は起きていない。

Q-3

- 医療機関や学会では PCR 検査が好まれ、抗原検査については否定的な見解が多い印象を受けている。また、迅速抗原検査キットについては精度の低さを懸念する声もあるようだが、今後抗原検査の評価をどのように高めるのか、また検査の使い分けはどのようになっていくと考えているか？

A-3

- PCR 検査は使用が認められている試薬の中でも感度や精度に大きな開きがあり、また、検体採取から検体輸送も含め検査品質を左右する要因は試薬の精度に留まらないため、一律に PCR 検査の精度が高いとは言えない。
- 高感度抗原検査は、検査時間が短いなど利便性が高く、精度も PCR 検査に準ずるもので、空港検疫所で採用された実績が示すようにその有用性は広く評価されている。
- 迅速抗原検査キットは PCR 検査や高感度抗原検査に比べて感度は若干劣るものの、機器が不要で即時に検査できることが大きなメリット。
- 今後は、それぞれの用途や場面に適した検査方法をしっかりと周知し、適切に使い分けていただくことが重要と考えている。

Q-4

- 足元で御社の抗原検査の引き合いや受注は増えているのか？

A-4

- 高感度抗原検査においてイタリアでの需要の顕在化に加え、ドイツの空港で採用されるなど、世界的に抗原検査に対する考え方が変わってきている。

Q-5

- PCR 検査のキャパシティについて、今後はどの程度まで拡充するのか？

A-5

- キャパシティの増強は計画通り進めている。現状は一日当たり 2,000 – 3,000 件という受託状況であり、早期にキャパシティがひっ迫することはないと考えている。

Q-6

- 感染症の歴史をみると、感染症の検査は PCR 検査から抗原検査へとシフトしている。新型コロナウイルスについて、PCR 検査から抗原検査へのシフトにはどのくらいの時間がかかると考えているか？

A-6

- 時期の想定は難しいが、ワクチンや治療薬が浸透しても検査は確実に行われる。ただし、検査価格はワクチンの浸透により、徐々に一般の検査価格帯に収束するものとする。

Q-7

- 高感度抗原検査について、競合が承認申請を進めている試薬は測定時間が短い。御社はどのように対応するのか？

A-7

- 当社は国内市場において、新型コロナウイルス高感度抗原検査が可能なルミパルスを約 1,400 台設置済みであることが大きな強み。また、空港検疫所において検査実績と経験を蓄積できていることは大きな優位性であると考えられる。こういった先行者メリットを活かしていきたい。

Q-8

- 空港検疫所において、水際対策が一部緩和された 11 月 1 日以降は一日当たり約 1,500 件の検査を実施しているが、今後の検査数の見通しは？

A-8

- 今回基準が引き下げられた国以外からの入国における抗原検査は引き続き求められる。今後海外からの入国者が増えていくことも想定され、当面大きな影響はないと想定している。

Q-9

- ドイツの空港で採用された抗原検査は、日本と同じ検査フローなのか？また、欧州においては競合が多い中、御社が採用された背景は？

A-9

- 日本の空港検疫所とは異なり、民間企業である Centogene 社が、任意で希望する旅行者および空港勤務者に有償で検査を実施するもの。当社は欧州子会社を通じて Centogene 社へ試薬を提供する。
- 世界初の自動機での抗原検査試薬として承認を得たことや製品の性能に加えて、日本の空港検疫所での採用実績などを総合的に判断して当社を選んでいただいたと考えている。

Q-10

- ドイツ以外の空港への拡大余地は？

A-10

- Centogene 社の今後の展開予定については、当社としてはお話しできる立場にない。

Q-11

- 羽田空港にて出国者向けの PCR 検査サービスを開始しているが、どの程度の検査規模を想定しているのか？

A-11

- 出国者向けの検査需要の想定は渡航者数の動向に左右される面もあり、現段階で予測できない。検査は空港近郊の川崎ラボで行うため、2 時間以内で結果を報告できるという利便性を示すことで、より多くの方にご利用いただきたい。

Q-12

- CLT が大部分を占めると想定される新型コロナウイルス関連売上高は競合他社に比べて貢献が大きいとを感じる。これは大病院との取引が多く、競合他社と顧客構成が異なるためか？

A-12

- 他社との顧客構成比較はできないが、当社は 2 月に PCR 検査の受託を開始して以来、高品質な検査提供体制を早期から整備してきた。その結果、病院や医療機関に限らず、多方面から検査を受託させていただいている。

Q-13

- 中期経営計画では新型コロナウイルスの影響を 2 年と想定しているが、見通しに変化はあるか？ また、3 年-5 年後はどのように考えているか？

A-13

- 新型コロナウイルス関連検査が収益性に影響を与える期間を最大 2 年と想定した見通しに変更はない。
- 今後ワクチンや治療薬が承認されれば日常的に実施する検査の一つになり、損益に大きく影響を及ぼす検査項目ではなくなると考える。